

2020.11.12

vol.84

シネマ・ド・リぶらの
コラム・ド・シネマ映画
を
読む

本日の上映作品 『恋におちたシェイクスピア』



11月12日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

16世紀末、『ロミオとジュリエット』の初演を背景とし、若き日の文豪シェイクスピアと、彼を信奉する上流階級の娘ヴァイオラとの秘められた恋物語を描いた傑作。エリザベス1世をはじめ、エリザベス朝を彩る歴史上の人物が多数登場する。1998年度アカデミー作品賞・主演女優賞ほか、主要7部門賞を受賞。日本でもキネマ旬報ベストテン1位を獲得した。

監督:ジョン・マッデン

出演:グウィネス・パルトロー、ジョセフ・ファインズ、ジェフリー・ラッシュ

製作:1998年 アメリカ カラー 123分

『映画で世界を読む』	山田 和夫/著	新日本出版社	778.04
『シネマで英語! 映画 100 選・使えるセリフ』	土屋 晴乃/著	春日出版	837.8
『恋におちたシェイクスピア』	マーク・ノーマン/著	ビー・アール・サーカス	932.7
『ミルワード先生のシェイクスピア講義』	ピーター・ミルワード/著	彩流社	932.5
『シェイクスピアと大英帝国の幕開け』	フランク・カーモード/著	ランダムハウス講談社	932.5
『シェイクスピア百科図鑑』生涯と作品	A.D. カズンズ/監修	悠書館	932.5
『ロミオとジュリエット』恋におちる演劇術	河合 祥一郎/著	みすず書房	932.5
『ロマンスの溢れる風景』 大切な人といつか行きたいときめきの場所	MdN 編集部/編	エムディエヌコーポレーション	290.87
『ロミオとジュリエット』	ウィリアム・シェイクスピア/原作	BL 出版	932.5
『シェイクスピアのたくらみ』	喜志 哲雄/著	岩波書店	932.5
『アカデミー賞 ハリウッドの栄冠』	長谷川 正/[ほか]執筆	共同通信社	778.253
『プルーフ・オブ・マイ・ライフ』	ジョン・マッデン/監督	USEN	778.253

コラム『恋におちたシェイクスピア』

『ロミオとジュリエット』誕生秘話？ K.M.

今回上映の作品は、「シネマ・ド・リぶら」上映作品としては比較的新しく、1998年にアメリカで製作されたイギリス映画です。この作品は、シェイクスピアの不朽の名作『ロミオとジュリエット』をベースとして、シェイクスピアの若き日に秘められた恋が誕生したという想定のもと、史実と虚構、現実と劇中劇を絶妙に絡ませて、面白くロマンティックに仕立てられたラブ・ロマンスの傑作です。1998年度アカデミー賞13部門にノミネートされ、作品賞、主演女優賞ほか主要7部門を受賞、全世界でも60を超える賞にノミネートされました。

実は私、この作品については、上映会の準備として、中世イギリスの演劇界やシェイクスピアなどについてはほとんど勉強せずDVDで視聴したので、沢山の立派そうな賞をとっているこの作品の世界にうまくはまり込んでいけるかと心配したのですが、意外と軽いラブコメディとして楽しめる作品でした。お堅い文学作品、気軽に観てはいけない誇り高き演劇作品として、とっつきにくそうなシェイクスピア劇も、できた当時は今の映画やTVドラマみたいに、一般娯楽だったのかもしれないという気がしました。

とは言え、舞台劇と映画の要素を上手く融合させ、シェイクスピアの数々の名作を下敷きにしてのアイデア・パロディ・伏線を散りばめ、ウィットとユーモアに満ちたセリフがてんこ盛りで作り上げられているこの作品を深く知るには、シェイクスピアの舞台劇を客観的に知っておくとベターでしょう。要領よく、このあたりを調べてみたい場合は、ネットで[シェイクスピア作品は何がすごいのか。ポイントやおすすめ作品を紹介(2018/07/31 <https://loohcs.jp/articles/106>)]というホームページを利用されるといいと思います。

さて、気軽に楽しめばいいと先述しましたが、主人公二人がそれぞれ「一人四役」、「一人三役」などという一寸ややこしいストーリーなので、時代背景と主要登場人物についての予備知識として、この作品の冒頭部分についてのあらすじを紹介しておきましょう。

時は16世紀、舞台はエリザベス王朝のロンドンです。芝居熱が過熱する中で、二つの芝居小屋が鎬を削っていました。カーテン座がイギリス1の人気役者リチャード・バーベッジを擁して好調であるのに対して、もう一方のローズ座は客が全く入らず、資金難のために経営者のベンズロー(ジェフリー・ラッシュ)には、借金取りに追い込まれる日々

が続いていました。頼みの綱だった劇作家のシェイクスピア(ジョゼフ・ファインズ)がスランプ状態で、期待の新作コメディの執筆も遅々として進んでいません。

そんなある日、新作コメディのオーディションにトマス・ケントと名乗る青年がやってきます。実は彼は芝居が大好きで新進気鋭のシェイクスピアを信奉する裕福な商人の娘ヴァイオラ(グウィネス・パルトロウ)の男装した姿だったのです。当時の演劇界では、風紀上問題があるという理由で女性は舞台に立つことを禁じられており、女性役は変声期前の若い男優が使われていたのですが、何とんでもこの新作コメディに参加したいと、ヴァイオラは敢えて男装してオーディションにやってきたのです。

ステージの上で一人芝居を演じ始めたトマスは、審査をする本物のシェイクスピアに驚き、逃げ出してしまおうのですが、その演技力を見初めたシェイクスピアはトマスの後を追ひ、商人の館に入り込みます。そしてここで、初めてヴァイオラと運命的な出会いがあり、恋が芽生えます(この時点で、ヴァイオラとトマスとが同一とは気付いてはいません)。

彼はその日から水を得た魚のように精力的に新作の玉成に傾注し始めますが、一方でヴァイオラは、貴族との縁組を望む両親によって、貧乏貴族のウェセックス卿(コリン・ファース)との意に染まぬ結婚話が進展中であり、ヴァイオラは、親が決めた結婚のためもう会うことができないという別れの手紙をシェイクスピアに送ります。到底納得できぬ彼は、再び商人の館を訪れ、トマスがヴァイオラの仮の姿だと知ります。この時点で二人は晴れて結ばれ、忍び逢いを続けます。夜ごと逢瀬を重ねる二人の囁きは、そのまま新作の戯曲「ロミオとジュリエット」の台詞として紡ぎ出されて行き、この恋が次第に運命の悲恋物語「ロミオとジュリエット」を形成してゆくことに……。

最後に、この作品は、女王の命令で、『十二夜』と題する新作喜劇の構想として、夫とアメリカに向かう途中、難破した船から一人生き残ったヴァイオラが、アメリカ大陸に上陸するというストーリーを夢想していることを暗示する美しいが不思議なシーンで幕を閉じます。『十二夜』という喜劇は実在し、この作品は難破した船から一人生き残ったヴァイオラという名の娘が海岸に打ち上げられる所から始まるそうです。